

障害と身体を めぐる旅2021

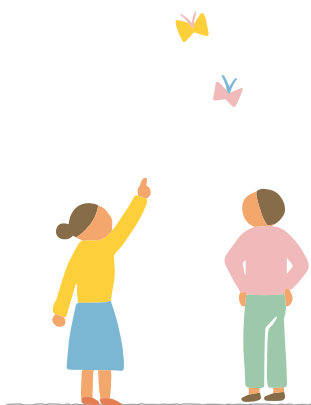
令和3年度 神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター 報告書

(運営：認定NPO法人 STスポット横浜)



神奈川県
障がい者
芸術文化活動
支援センター

令和
3年度



ごあいさつ

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターは、2020年4月から活動を開始しました。

運営団体であるS Tスポット横浜は、神奈川県横浜市にあるNPOです。「アートの持つ力を現代社会に活かすこと」をミッションに、小劇場「S Tスポット」を運営する芸術機関として1987年に活動を開始しました。2004年からは地域コミュニティに向けた活動を担う、地域連携事業部を設置し、学校での芸術家による授業の実施や、地域の文化団体支援などを行っています。

福祉分野における活動は、2015年から開始しました。文化庁による助成や神奈川県との協働事業を通し、地域に暮らす障がい者が芸術文化活動を通して生活の質を向上させ、社会の中で顕在化することで、障がいの有無にかかわらず共生する社会の実現に向けた基盤整備の一翼を担うことを目指した活動を続けています。

新型コロナウイルス感染症拡大とともにスタートした神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターですが、2年目を迎えた今年度も、まだまだコロナ禍の影響が残る1年となりました。本来ならば、県内各地域のみなさんのもとへごあいさつに伺ったり、活動の様子を拝見しながら意見交換をする機会を持ちたいのですが、それが難しい状況も続きました。

そこで、今年度はオンラインでの交流の場や、ウェブサイトでの情報発信などを通して、みなさんの現在の困りごとなどをお知らせいただき、必要と思われる情報をお届けしました。身近な地域のなかで触れられる芸術文化の存在に目を向ける機会となったのなら幸いです。

本年もさまざまな風景、表現と出会いました。

この冊子では、旅の様子的一端をみなさまにお伝えいたします。





目次

05 神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターについて

■ 〈つなぐ〉

07 相談対応内容

08 情報収集・発信

10 文化施設のみなさんと考える障がいのあれこれ オンライン座談会

11 協力委員会

■ 〈つくる〉

14 ぱれっと・はだの×岡田智代（ダンサー・振付家）

— 「身体の声に耳をかたむける」

16 第3けやき×ドゥイ（造形ユニット）

— 「それぞれの“好き”で彩る」

18 のびやか×西井夕紀子（作曲家）

— 「音をつむぐ、音から広がる」

20 スプラウト×尾引浩志（音楽家）

— 「はじめての音に触れる」

22 リエゾン笠間×額田大志（作曲家）

— 「音とのかかわり方を見つける」

24 コラム リエゾン笠間でのワークショップを見学して

— 「音楽の世界の入り口に立つ」野呂田理恵子（女子美術大学 准教授）

■ 〈支える〉

26 勉強会 第1回「福祉施設における日中活動の今とこれから」

28 勉強会 第2回「重度障がいのある人との表現の場づくり」

30 報告会 地域とともに考える障がい福祉と芸術文化

33 今年度の事業を振り返って

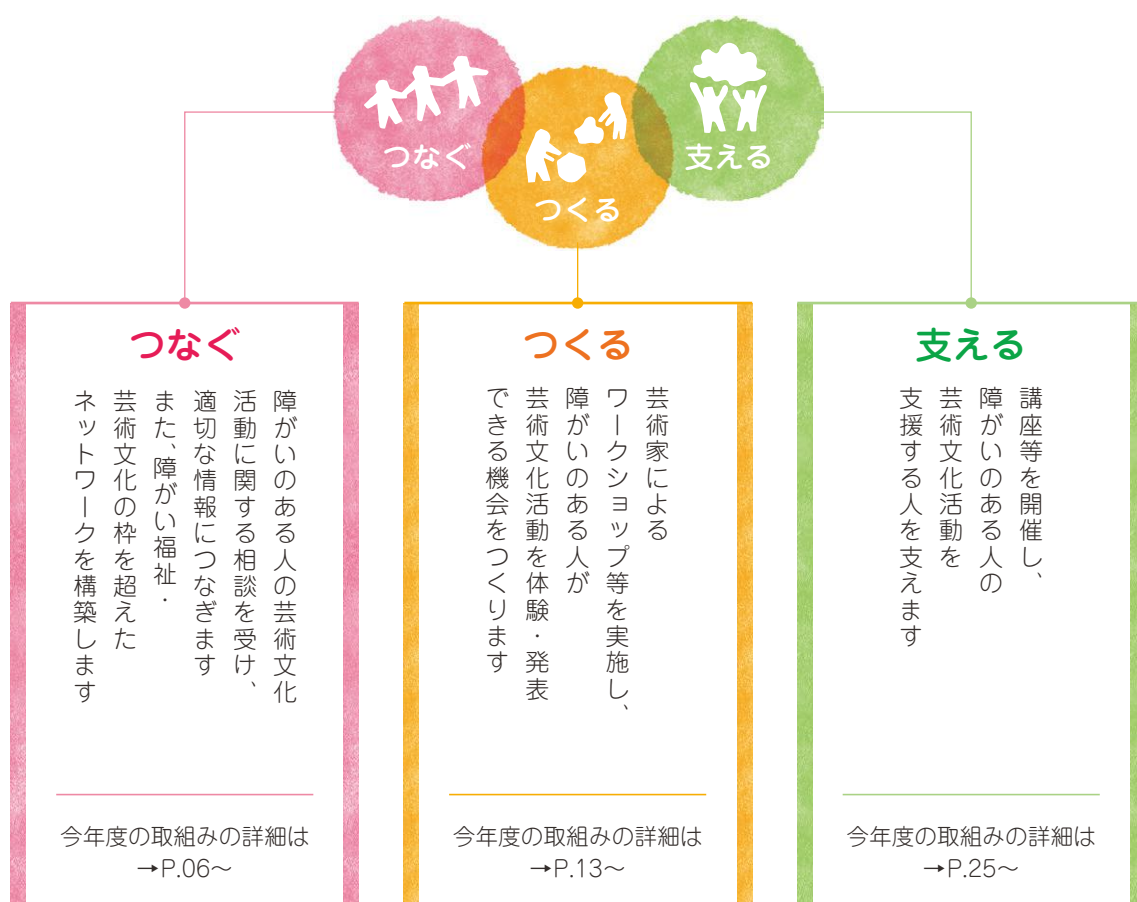
34 おわりに



神奈川県障がい者芸術文化活動 支援センターとは

神奈川県内の障がいのある人が身近な地域で文化芸術に触れられるように、
障がい福祉・芸術文化のネットワーク構築を目指し、令和2年度4月に開設しました。

「つなぐ」「つくる」「支える」の3つを柱に、活動を展開しています。



厚生労働省「障害者芸術文化活動普及支援事業」について

障害のある人が芸術文化を享受し、多様な芸術文化活動を行うことができるように、地域における支援体制を全国に展開し、障害のある人の芸術文化活動の振興を図るとともに、自立と社会参加を促進することをねらいとした事業です。2017(平成29)年度から実施しています。

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaihashukushi/bunka.html

厚生労働省
ウェブサイト



つなぐ



ここでは、障がいのある人の芸術文化活動に関する情報をつないだり、県内のネットワーク構築に取り組んだ活動をご紹介します。パンフレットで相談窓口の周知し、障がいのある人の芸術文化活動に関する相談や問い合わせが多く寄せられました。ウェブサイトでは県内の公募・イベント情報などを発信しました。また、県内の文化施設・団体のみなさんといっしょに障がいのある人にとっての文化施設のあり方について、考える機会を作りました。障がい福祉、芸術文化の枠を超えたネットワーク構築を目指します。

相談支援

文化施設のみなさんとのオンライン座談会

協力委員会

情報収集・発信

相談対応内容

障がい者やそのご家族、障害福祉サービス事業者等から芸術文化活動に関する相談を受け付けました。
対応件数は127件でした。(2022年2月28日時点)

相談件数の内訳

① 相談者属性 合計：127件

障がい当事者	46
障がい当事者の家族	6
障害福祉関係者	43
芸術家・文化団体・文化関係者	11
文化施設	2
市民団体	3
自治体・他支援センター	6
その他	10

② 相談方法 合計：127件

面会	16
電話	53
メール	42
オンライン	3
問い合わせフォーム	12
その他	1

③ 居住地別 合計：127件

横浜	48
川崎	18
相模原	14
横須賀・三浦	13
湘南東部	3
湘南西部	5
県西	3
県外	10
不明	10

④ 相談内容 合計：127件

鑑賞の機会	2
創造の機会	26
発表の機会	32
交流・連携	33
調査研究・保存	6
権利保護	2
人材育成	11
情報発信	9
その他	6

相談内容の詳細

- 創造について…………… ● アート活動をしている福祉施設に通いたいのだが、どんなところがあるのか
- 発表について…………… ● 趣味で絵を描いており、もっといろんな人に見てもらいたい
- 交流・連携について…………… ● いっしょに音楽を楽しむ仲間が欲しい
- 調査研究・保存について…………… ● 卒業論文で障がい者の芸術文化活動や支援センターの取り組みを取り上げたい
- 人材育成について…………… ● 福祉施設でワークショップを企画している。講師となるアーティストについて相談したい
- 情報発信について…………… ● 障がい者による絵画作品に関する公募展や、イベントなどの広報に協力してほしい
- その他…………… ● 支援センターの活動内容や、障害者芸術文化活動普及支援事業について教えてほしい

相談内容から見てきたこと

- 創造・発表・交流に関する情報を求める、当事者やそのご家族からの相談が多くありました。一方で、さまざまな芸術団体や文化施設で行う障がいのある人に向けたイベント周知に関する相談もありました。情報をつなぐために「神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターだより」(詳細はp.8)として、集まった情報を必要な方にお届けしました。
- 求められる芸術文化活動は、福祉施設における仕事としての活動や、同じ障がいのある方たちといっしょに創作をする活動、障がいの有無を問わない公募展など、多岐にわたっています。障がい福祉、芸術文化だけでなく、教育や生涯学習など、他分野との連携の必要性を感じています。

情報収集・発信

パンフレット

パンフレットを作成し、相談窓口など事業の周知を行いました。



ウェブサイト

ウェブサイトでは、センター主催事業などの広報をしました。また、「神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターだより」として、県内外の障がい者の芸術文化活動に関する情報発信を行いました。こちらのお知らせは、メーリングリストでもお届けしました。



メディア掲載

- 神奈川県社会福祉協議会 機関紙 福祉タイムズ 2021年12月号
- かながわ県だより 令和4年1月号No.802「ともいきバトン」
- 特定非営利活動法人けやきの会 広報誌Vol.15 2022年冬号
- ぱれっと・はだの 広報誌第6号 2022年1月
- NPO法人 障害児・者・家族サポート事業所 スプラウト スタッフブログ 2022年1月18日

執筆

- 「地域からアートとの出会いを立ち上げる」
2021, 公益社団法人 日本発達障害連盟・編『発達障害白書 2022年版』第6章 社会参加, 明石書店

シンポジウム等への登壇

- 「つながる!ひろがる!パラアート・ミーティング」(主催:公益財団法人 川崎市文化財団/2022年3月10日)

神奈川県内における障がい者の 芸術文化活動についてのヒアリング結果報告

ここでは、神奈川県内の障がい福祉団体12団体、芸術文化団体3団体、自治体2団体に対してのヒアリング結果をお伝えします。(調査期間:2021年5月18日~2021年8月25日)分野に関わらず、情報共有の場や相談できる関係など、つながりが必要とされていることがうかがえます。障がい福祉と芸術文化を横断するようなネットワークの構築を今後も続けていきます。

現在取り組んでいるまたはこれまで取り組んできた活動

障がい福祉団体

生活の余白、人生の楽しみを広げる活動として、音楽や創作などの芸術文化活動を取り入れている

特に1日のプログラムを決めず、本人がやりたいことができる過ごし方を心掛けている

芸術文化団体

ホールでの公演などに障がいのあるお客さんがいることがあり、その都度やりとりしながら対応している

社会福祉協議会の協力を得ながら、施設内の人権研修や福祉研修を行っている

自治体

市として障がい者施設で作った製品の販売や、作品展示、舞台発表をするイベントを年1回開催している

市内のアートフェスティバルに障がい者が参加している

今後の課題、要望

障がい福祉団体

施設職員だけでは活動内容がマンネリになりがち。他施設の活動の情報など、身近なものでできるレクリエーションのヒントがあれば知りたい

施設が存在が地域に根差すきっかけとして、芸術文化活動を活かしていきたい

芸術文化団体

地域の福祉施設や、他の文化施設など、連携できるところがあれば教えてほしい

障がい者の理解を深めるような研修の情報があれば知りたい

自治体

障がい者の作品展示、舞台発表などのイベントに、もっと多くの市民に参加してほしい。広報に協力してもらいたい

ヒアリング先一覧

障がい福祉団体 (12団体)

スプラウト、きしゃポッポ(以上平塚市)、あさひ学苑ポッシブ校(厚木市)、ぱれっと・はだの(秦野市)、トータスキッズ、skaskaippo(以上横須賀市)、のびやか、第3けやき(以上相模原市)、いぬくら(川崎市)、みどり福祉ホーム、リエゾン笠間、横浜市中山みどり園(以上横浜市)

芸術文化団体 (3団体)

ひらしん平塚文化芸術ホール(平塚市)/ 南足柄市文化会館(南足柄市)/ 逗子市文化プラザ(逗子市)

自治体 (2団体)

逗子市(障害福祉班)/南足柄市(障がい福祉課)

文化施設のみなさんと考える障がいのあれこれ

オンライン座談会

地域の文化拠点となる劇場やホール、美術館などの文化施設。

障がいのある人を含むさまざまな人が訪れる場所として、どんなことがあったらよいのか、文化施設の職員のみなさんと
いっしょに考えるオンライン座談会を行いました。各回ではすでに取り組み進めている事例についてゲストから
お話をうかがいながら、県内各地の文化施設のみなさんで考えを深める機会となりました。

第1回

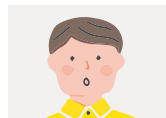
「美術館での障がい児・者に向けた取り組み」

日時:2021年10月8日(金) 16時~17時 参加者:4名

ゲスト:立浪佐和子(横須賀美術館 学芸員)



立浪佐和子



この回では横須賀美術館・学芸員の立浪佐和子さんに、障がいのある方を対象に
続けている美術館での取り組みについてお話をいただきました。

横須賀美術館では2007年の開館当初から「すべての人に開かれた美術館」を目指し、障がいのある方も参加しやすいワークショップの実践や、視覚障がいのある
方に向けた鑑賞支援に関する講演会などを展開しています。そこからさらに地域と
の関わりを深めたいと考え、2018年度からは市内の福祉施設職員向けに創作
ワークショップやレクチャーを始めたそうです。障がいのある人にとって美術館が
どのような場であったら良いのかを常に考え続けていることが伝わってくるお話
でした。お話を受けて、参加者からも「ロビーコンサートなど出入り自由な環境で、
0才児や障がいのある方も参加しやすい機会を作っている」など、障がいの有無に
関わらず、みんなが気兼ねなく文化施設で過ごすために実践している工夫を共有
していただきました。

第2回

「ホールでの社会福祉協議会と協働した取り組み」

日時:2021年12月10日(金) 16時~17時 参加者:10名

ゲスト:北村綾子(南足柄市文化会館 事業担当)



北村綾子



2回目は南足柄市文化会館・事業担当の北村綾子さんに、ホールでの福祉関連の
企画について紹介していただきました。

毎月映画の上映会を行っている南足柄市文化会館では、今年度から小児がんや
発達障がいなど福祉をテーマにした映画も取り入れるようになりました。上映会当
日は、地域の福祉施設の作品展や、情報コーナーなど関連企画も開催しています。
このような福祉関連の事業を行うときには、点字・音読広報を依頼するなど、社会
福祉協議会を通してボランティアの力を借りることが多いといいます。北村さんは
「障がいに限らず、さまざまな生きづらさを抱える人がある。地域の情報に目を向
け、『たくさんいろいろな人が集う場所』を目指したい」と最後を締めくくりました。
参加者からは、地域とのつながりづくりや関係性の変化について、さらに質問があ
りました。その地域にとって文化施設がどのような場所であったらよいのか、それぞ
れが思いを巡らせる時間となりました。

協力委員会

神奈川県内の多分野における関係者のネットワークづくりや、支援センターの運営方針について検討する場として、県内外で活動する障がいがある人との芸術文化活動に造詣の深い専門家による協力委員会を設置し、年2回の会議を開催しました。今回は神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターがどんな役割を担うべきなのか、また特に課題に感じている県内の障がいのある人の芸術文化活動に関する状況把握に向けてどのように取り組むべきか、意見交換をしました。

◆ 構成員 ◆

専門委員	佐塚 玲子（特定非営利活動法人 よこはま地域福祉研究センター センター長） 又村 あおい（一般社団法人 全国手をつなぐ育成会連合会 事務局長兼常務理事） 和田 剛（障害者スポーツ文化センター ラポール上大岡 管理運営課）
行政関係者	神奈川県障害福祉課、神奈川県共生推進本部室、神奈川県文化課

第1回

協力委員の紹介/支援センターに期待すること

日時：2022年1月7日（金） 15時～17時

場所：障害者スポーツ文化センター ラポール上大岡 多目的室

（神奈川県横浜市港南区上大岡1-6-1 ゆめおおおかオフィスタワー8F）



初回ということで、まずはそれぞれのご所属での活動についてご紹介いただきました。続いて支援センターから、今年度の事業方針と課題についてお話ししました。障がい福祉、芸術文化、教育などの多分野が連携するネットワークを作り、芸術文化がより障がいのある人にとって身近となることを目指します。

今後の展開について又村さんからは「目指すものは同じでも、芸術文化を取り入れることで障がい者支援のあり方を広げていきたいのか、障がい者支援の視点を活用して芸術文化の意義を問い直していきたいのかによって、立脚点は違うため、整理が必要なのではないか」という投げかけがありました。また佐塚さんは、芸術文化が障がいのある人にとってなぜ大切なのかを掲げるべきとしてうえで、自身の成長や生活の豊かさを目指すための「活動」、地域社会のための「仕事」、賃金が発生する「労働」に整理をした考え方をお話してくださいました。このお話を受けて和田さんからは「この3つの分類のなかでも、人によって求めることは違う。芸術文化の役割を集約することは難しいが、それぞれに対して何かしらのアシストをするのが支援センターの役割なのでは」と、支援センターへの期待を寄せていただきました。

第2回

県内の障がい者の芸術文化活動の 状況把握に向けて必要なことはなにか

日時:2022年2月25日(金) 15時～17時 場所:オンライン会議システムZoomを使用



支援センターでは相談支援などの事業をとおして、特に県内の福祉施設における障がい者の芸術文化活動に関する課題の把握や、情報の蓄積の必要性を感じています。今回は状況を把握するためにどのように調査をすればよいのか、委員のみなさんからご意見をいただきました。

ひと口に障がい者の芸術文化活動といっても、さまざまな取り組みが行われています。それぞれの活動をすくいあげるために、又村さんからは「芸術文化活動はしていないという福祉施設においても、実は日々の営みのなかに芸術文化に通じるものがあるかもしれない。日ごろの取組みに価値がある、意味があることだということを見つけることも大切なのでは」、また佐塚さんからも「芸術文化は自尊感情や誰かと共感してつながる実感などをもたらすきっかけにもなる。質問をされることで、職員のみなさんがそういったことにも気づくような機会となるとよい」と、ふだんの生活での芸術文化の可能性に気づきをもたらす内容になるとよいのでは、というお話がありました。

また、和田さんは「まったく異なる分野とのつながりが発展し、新たな可能性が生まれることもある」と話し、福祉施設において多分野のネットワーク形成をどのような場面で求めているのか明らかにする必要性もあるという意見がありました。ネットワークづくりについては、まずは支援センターの存在を周知し、さまざまな分野のみなさんと意見交換をする場も求められます。今回いただいたご意見をもとに、今後の取組みを検討していきたいと思います。

専門委員プロフィール



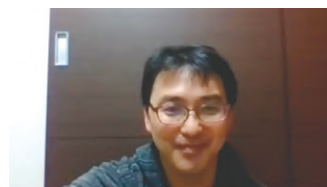
佐塚玲子 さつか・れいこ

横浜市地域ケアプラザ職員、認定NPO法人市民セクターよこはまの勤務経験から、地域福祉への関心を深める。2012年特定非営利活動法人よこはま地域福祉研究センターを故 泉一弘と設立。以来、センター長と副理事長を兼任。



又村あおい またむら・あおい

令和元年度まで平塚市役にて福祉総務課に在籍。過去、障害福祉課在籍時は、障がい者福祉計画、障がい児支援全般などを担当。平成26年度に内閣府へ出向、障害者差別解消法の策定に関わり障害者差別解消法アドバイザーも務める。令和2年度より現職。



和田剛 わだ・たけし

2001年より社会福祉法人横浜市リハビリテーション事業団に入職。障害者スポーツ文化センター横浜ラポール文化事業担当を経て現職。障がいのある方の芸術発表の場でもある「横浜ラポール芸術市場」をはじめとした障がい者の余暇支援事業を展開。

つくる



ここでは、障がいのある人が芸術文化活動に触れる機会をつくる活動についてご紹介します。今年度は県内5か所の障害福祉サービス事業所等にて芸術家によるワークショップを実施しました。今回は実施施設を公募で募り、21件あった応募のうち2か所の施設にお伺いすることになりました。コロナ禍の影響でイベントや施設外の人と交流する機会が少なくなっているなか、いっしょに身体を動かしたり、音に触れたり、ものを作ったりすることでお互いを知り合う、豊かな時間が生まれました。

ワークショップ実施



ぱれっと・はだの × 岡田智代

ダンス
DANCE

「身体の声に耳をかたむける」

- 期間：2021年10月30日(土)、11月20日(土)、12月18日(土) ● 時間：13:30～14:30 ● 参加者：1日目:7名、2日目:4名、3日目:8名
- 対象：主に精神障がいのある成人 ● アーティスト：岡田智代(ダンサー・振付家) ● アシスタント：山下彩子
- 施設名：秦野市地域生活支援センターぱれっと・はだの ● 運営法人名：一般社団法人 秦野市障害者地域生活支援推進機構
- 施設種別：地域活動支援センター ● 住所：神奈川県秦野市本町2-7-25 ● URL：<http://hcp-support-hadano.or.jp/newpage3.html>

秦野市地域生活支援センターぱれっと・はだのは、相談支援や就労支援などの機能を備えた障害者地域生活支援拠点として、2017年に設置されました。今回お伺いした地域活動支援事業では、フリースペースの開室や音楽や創作プログラムの開催などを通して、主に精神障がいのある方の居場所を提供しています。現在80名程いる利用登録者は、自分のタイミングや興味に合わせて

施設を利用しています。プログラムのさらなる展開のきっかけとして、今回の公募に応募がありました。コロナ禍の影響で身体を動かす機会が減っており、また今まで取り組んだことがなかったというお話を受けて、ダンサー・振付家の岡田智代さんとダンスの取組みを行うことになりました。思うままに身体を動かしたり、お互いの動きを真似し合ったり、身体を通した表現を楽しみました。



各日の様子



10/30(土) 手ぬぐいを使ったストレッチなど、自分の身体に向き合うことから始めました。

参加者 7 名



11/20(土) 自分の名前と好きな食べ物を身体の動きで表す「自己紹介ダンス」は、一人ひとりの個性が光ります。

参加者 4 名



12/18(土) 最後は施設の中から飛び出して、青空の下で自由に身体を動かしました。

参加者 8 名

実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

初めはどう動いてよいか、戸惑う方が多かったように見えたのですが、回を重ねるごとに思い思いに自由な表現ができるようになっていくのが興味深かったです。また、言葉でのコミュニケーションが苦手な方たちが、いきいきと表現していたのが印象的でした。自分のことをもっと表現したい熱意を秘めている方の存在にも気がつくことができ、身体を通じた表現やコミュニケーションの可能性を感じました。(川嶋恵子)

みなさんの
いつもと違った
表現が見られた



他の職員さんより

表現の
自由があった



利用者みなさんより

みんなで
輪になって踊ったのが
楽しかった

アーティストからのコメント

今回は参加者が毎回変わったり、子どもから大人まで年齢の幅も広く、障がいの有無もさまざまでした。でもそれって世の中そのものだとしみじみ思います。用意された場所で予定通りの事を決まった人に向けてするのではなく、目の前にいる人たちに向けて、押し付けることなく一緒にできたことはとても嬉しく素敵な時間でした。もしかしたらこのような時間が教育の現場でも、地域支援でも一番必要なのかもしれません。(岡田智代)

まとめ

今回は、ぱれっと・はだのの利用者のみなさんだけでなく、子どもたちや地域にある障害者支援施設で暮らす方も参加していただきました。ぱれっと・はだの参加者同士も含めてふだんはあまり接点のないみなさんでしたが、身体にフォーカスをあててみんなで表現を探す時間を通して、各回の最後にはぐっと距離感が縮まっているように感じました。発する言葉や生活背景など、その人を知る手立てはたくさんありますが、身体から伝わるその人らしさはこんなにも豊かなのだということに、改めて気づかされました。

おかだ・ともよ
岡田智代

1956年生まれ。幼少より踊る。大学卒業後一度ダンスから離れるが、結婚後三児の母となった後、再び踊り始める。2005年トヨタコレオグラフィーアワードのファイナリスト。ソロ活動の他、多田淳之介、振子びじん、野上絹代、FAIFAI、山下残等の作品に出演。近年は演劇公演にも幅を拡げる。中高年や親子向け、特別支援学校や個別支援級などでもワークショップを行う。静謐な時間と炸裂するエネルギーを併せ持つ。日常的な身体に目を向け、ただ生きるように踊る。<http://odorum.net/>





第3けやき × ドゥイ

美術

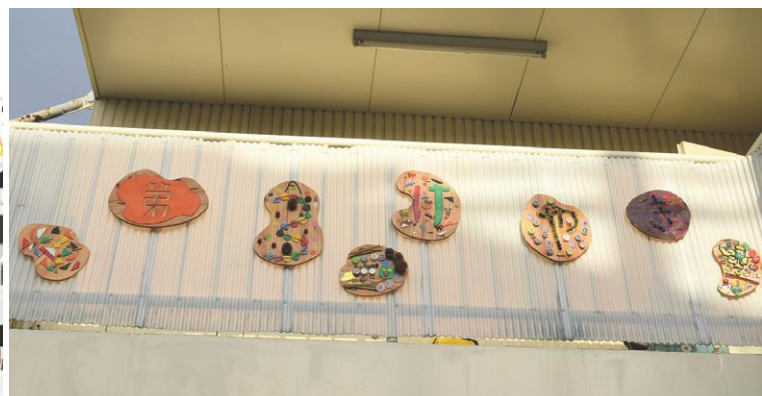
ART

「それぞれの“好き”で彩る」

- 期間：2021年11月9日(火)、11月30日(火)、12月14日(火) ● 時間：10:30～12:00 ● 参加者：1日目:4名、2日目:6名、3日目:9名
- 対象：主に精神障がいのある成人 ● アーティスト：ドゥイ(造形ユニット)
- 施設名：地域活動支援センター 第3けやき ● 運営法人名：特定非営利活動法人けやきの会 ● 施設種別：地域活動支援センター
- 住所：神奈川県相模原市中央区由野台2-27-10 ● URL：<http://keyaki.blog.jp/>

相模原市にある第3けやきは、主に精神障がいのある方が日々を過ごす地域活動支援センターです。登録者は25名、1日10人程度が利用しています。特に地域貢献・地域交流活動に力を入れ、ゴミ拾いや落書き消し、地域行事への参加を行っています。さらに地域との交流を積極的に行っていくきっかけとして、今回公募に応募してくださいました。まずは第3けやきという場所を地域にアピール

する看板や装飾をつくりたいということで、今回は造形ユニット・ドゥイの小野亜斗子さんと轟岳さんにご一緒にいただきました。身近な素材をラミネートしたり、木材に貼ったりして、参加者それぞれが装飾や看板となるパーツを作っていました。決まった完成形を目指すのではなく、作る過程を楽しむ時間となりました。



各日の様子



11/09(火) ひもやモール、雑誌の切り抜きなどをラミネート。
10:30-12:00 完成品は窓に貼って装飾をしました。

参加者 4 名



11/30(火) 参加者で分担し、ビー玉やプラ段など好きな素材を
10:30-12:00 使って一文字ずつ看板を作ります。

参加者 6 名



12/14(火) ラミネートを再び。マグネットをつけた装飾の他、
10:30-12:00 カバンやノートに加工する方もいました。

参加者 9 名

実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

新しい環境や新しい経験が苦手なメンバーもあり、ワークショップ開始時はとても緊張していたように思います。しかしドゥイのお二人から説明を受け、自分の好きな素材を使って、自由に作品をつくってよいと分かってからは、メンバーの目の色が輝いていくのが分かりました。メンバーの持つ力を引き出すためのヒントをいただいたような気がします。(山田龍)

今後の活動に
活かしたい



他の職員さんより

自分の新たな
一面に気づけた



利用者のみなさんより

徐々に
ものづくりを
楽しんだ

アーティストからのコメント

最初は参加していた人たちの数も少なく、みなさん静かな様子でこちらをじっと見ながら説明を聞いていました。回を重ねるごとにだんだん人数が多く、賑やかになって、作り始めると意思や願望みたいなものがあちらこちらで現れてきました。手を動かしているうちに参加者のみなさんの表情も柔らかくなっていった気がします。作るという行為を通して、お互いにふだんは気づかないようなことも共有できたのではと思いました。(ドゥイ)



まとめ

みんなでいっしょに一つの作品を作るというよりは、一人ひとりが好きなものを作り、組み合わせると看板や装飾が完成するというようなかたちで進んだ3回でした。それでも、手を動かしながら隣の人が使っている材料を見て「自分もやってみよう」と試してみたり、完成品を見合って「ここがいいね」という言葉を交わし合うなど、この時間を共有している雰囲気がありました。成功／失敗という価値観から解放されて、けやきのみなさんそれぞれの魅力がそのまま表れた装飾が出来上がったように思います。

ドゥイ

小野亜斗子・轟岳によるユニット。2006年より、横浜・石川町の洗濯屋さん店舗跡を自ら改装した「ドゥイ山」にて、「ドゥイのこども造形教室」をスタート。子どもたちとの関きのセッションを日々展開。教室以外でも保育園や幼稚園、学童保育所の他、各地イベントにてワークショップを考案・実施。参加者それぞれの面白さやひらめきと即興性を大切に考える、「クリエイティブな遊びの時間」を研究している。

<http://duilab.com/>





のびやか × 西井夕紀子

音楽
MUSIC

「音をつむぐ、音から広がる」

- 期間：①2021年11月5日(金) ②2021年12月28日(火) ③2022年1月15日(土) ● 参加者：1日目:13名、2日目:25名、3日目:15名
- 時間：①13:30~14:20 ②10:45~11:15/11:20~11:45 ③10:35~11:25 ● 対象：主に知的障がいのある成人
- アーティスト：西井夕紀子(作曲家) ● アシスタント：内海正考、中藤有花、宮坂洋生、松島俊哉、YuimaEnya
- 施設名：生活介護支援事業所 のびやか ● 運営法人名：社会福祉法人さがみ愛育会 ● 施設種別：障害福祉サービス事業所(生活介護)
- 住所：神奈川県相模原市中央区横山4-12-1 ● URL：<http://nobi-yaka.sukoyakahoikuen.jp/>

のびやかは、相模原市中央区にある生活介護施設です。主に知的障がいのある40名程度の方が通い、木工や陶芸などの製品づくりに取り組むなど、それぞれのペースで時間を過ごしています。3階建ての建物の内、1~2階は認定こども園すこやか、3階はのびやかとなっています。作曲家の西井夕紀子さんとお伺いするのは

2018年度、2020年度に続き今回で3回目。これまで西井さんと重ねてきた音楽を通じた関わりをさらに広げたいという思いから、今回はすこやかの子どもたちもいっしょに参加する場面もありました。各回では多様なアシスタントにご一緒にいただき、身体、声、楽器とさまざまなアプローチで音楽を楽しむ時間となりました。



各日の様子



11/05(金)

13:30-14:20

参加者 13名

ダンサーの内海正考さんとともに、音と身体を呼応させるように、声を出したり身体を動かしました。



12/28(火)

10:45-11:15/11:20-11:45

参加者 25名

子どもたちもいっしょに、いろんな楽器の音でやりとりをする「おしゃべり」を楽しみました。



01/15(土)

10:35-11:25

参加者 15名

最後は「歌いたい」「踊りたい」といったエネルギーがうねりとなって会場に満ちていました。

実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

今回も西井さんを中心に、個性豊かなアーティストに来ていただき、歌いたい人、楽器を奏でたい人、踊りたい人、少し離れて見守りたい人、それぞれ楽しんでいる様子がうかがえました。「認定こども園すこやか」と合同で行う機会もあり、子どもたちと関わりながら、ともに充実した時間を送ることが出来ました。活動を重ねるごとに熱量も増していき、心地よい空間が作り出されていたように思います。(小野塚豊治)

西井さんたちと参加者の一体感に感動した



他の職員さんより

うたやおどりが楽しかった



利用者のみなさんより

西井さんは仲間です

アーティストからのコメント

初回はダンサーの内海さんにより、音楽家だけでは引き出せなかった身体がたくさん見られました。2回目ははじめましての子どもたちを囲み、のびやかなみなさんとは音楽を奏でる仲間として一歩踏み込めたと感じました。ヴァイオリンの中藤さん、コントラバスの宮坂さんとおしゃべりのように演奏することに挑戦し、対話の集合としておもしろい音楽が聴こえました。最後は初年度のメンバーYuimaさん、松島さんと。時間を重ね私たち自身も自然に音を出せるようになりました。歩き回るとそれぞれの楽しみ方を再発見でき嬉しかったです。(西井夕紀子)

まとめ

3年前に西井さんとのびやかを訪れてから、途中1度もお伺いできなかった年やオンラインでの実施を交えた年も経て、音楽を通したつながり続けてきたことを実感した3日間でした。お互いに信頼関係が築けたなかで生まれる音や振る舞いはのびのびとして、子どもたちとの取り組みでは、のびやかなみなさんもいっしょに音楽に親しむ場をいっしょに作っていたことが印象的でした。時間をかけて関係を紡ぐことで、ワークショップの場が「体験」から「参加」そして「創造」に変化していくことに気づかされました。

にしい・ゆきこ
西井夕紀子

1983年生まれ。作曲家。東京国際芸術祭参加演劇作品『アトミック・サバイバー -ワーニャの子どもたち-』(演出:阿部初美、2007)、ドキュメンタリー映画『おとなのかぐく』(配給:Studio Q-Li、監督:忠地裕子、2014)、フェスティバル/トーキョー20参加作品『わたしたちは、そろっている。』(モモンガ・コンプレックス、2020)など、舞台、映画への楽曲提供を行うかわら、人が音楽を奏ではじめる瞬間・作りはじめる瞬間に魅力を感じ、学校、文化施設、福祉施設でセッションや曲作りを実施。東京芸術大学音楽学部音楽環境創造学科卒業、同大学院修了。 <https://www.yukikonishii.com/>





スプラウト × 尾引浩志

音楽
MUSIC

「はじめての音に触れる」

- 期間：2022年1月11日(火) ● 時間：13:40~14:35 ● 参加者：13名
- 対象：主に身体障がいと知的障がいを併せ持った成人 ● アーティスト：尾引浩志（音楽家）
- 施設名：スプラウト ● 運営法人名：NPO法人障害児・者・家族サポート事業所 スプラウト ● 施設種別：障害福祉サービス事業所(生活介護)
- 住所：神奈川県平塚市北豊田510-3 ● URL：<http://sprout.or.jp/index.html>

平塚市にあるスプラウトは、10代~40代の方が利用する生活介護と、子ども達が過ごす放課後等デイサービスの事業を行う施設です。利用される方のほとんどが車椅子を使用しており、痰の吸引など医療的ケアが必要な方もいます。ふだんから地域のボランティアを招いた音楽鑑賞の機会など、利用者の方のみなさんの経験や人との関わりが広がるような活動をしています。

今回は、特にみなさんが好きな音楽の中でも、あまり触れたことがない音を体験したいということで、音楽家の尾引浩志さんにご一緒いただきました。口琴やホーメイ、イギリスや尾引さんの自作楽器「オケショール」など、楽器の紹介もしていただきながら、初めて聞く音を楽しみました。



活動の様子



01/11(火) 13:40-14:35 参加者 13名 尾引さんが奏でる不思議な響きに、みなさん引き込まれている様子でした



実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

「ただ聴く」という試み。人とふれあうことが大好きなスプラウトのみなさんにとっては「こういうのは苦手かなあ」と思っていました。尾引さんの世界にスッと全員が引き込まれました。物理的な距離は遠いのに、何だかとても近いような気がする不思議な空間ができあがりました。いつもの場所、いつもの顔ぶれなのに何か違う？口琴の音が皮膚から語りかけてくる感じ。それがとても心地よかったです。(佐藤大輔)

見たこともない
楽器が次々出てきて
「なににな？」と
盛り上がった



他の職員さんより

利用者のみなさんも
不思議そうにしていた

頭の中に
どんどん入ってきて
楽しかった！



利用者のみなさんより

踊れるのも
よかった

アーティストからのコメント

いろんな声や楽器の音を楽しんでもらいたいという気持ちでスプラウトを訪れ、みなさんの反応を感じながら演奏をしました。1回のみの実施でしたが、言葉にならない声、声にならない言葉をたくさん感じられたことは、表現者としてこれからの活動の励みになると思います。でもやっぱりもう1回！またスプラウトに遊びに行きたいです！（尾引浩志）

まとめ

もともとは「ホールなどの文化施設で芸術鑑賞をしてみたい」という職員さんの気持ちも聞かれていました。コロナ禍で文化施設に出かけることは難しいけれども、生の音を体感する時間となったのではないかと思います。どこか遠い世界の言葉のように聞こえる口琴やホーメイの響きは空間全体を伝わっていき、みなさんを包み込むようでした。耳で聞くだけでなく、身体全体で音を感じていたのではないかと思います。

おびき・ひろし
尾引浩志

南シベリア、トゥバ共和国に伝わる倍音唱法「ホーメイ」、手のひらに入る小さな倍音楽器「口琴」などを操る倍音音楽家。倍音楽団「倍音S」(バイオンズ)の活動を経て、06年にはNHK教育テレビの幼児向け音楽番組「あいので」にレギュラー出演。エキセントリックな番組として話題を呼ぶ。能楽家、ダンサーなどとの共演、演劇の舞台での演奏、音遊びのワークショップなど、ジャンルも国境も飛び越えて活動中。2016年、音を「醸す」楽団「KAMOSU」結成し、絶賛醸し中！ <https://www.kamosu.asia/> (KAMOSU)



各日の様子



12/15(水)

10:15-11:30/14:00-15:00

参加者 19 名

額田さんたちの演奏を聞いたあと、みなさんもアフリカの民族楽器などを鳴らして参加しました。



12/21(火)

10:15-11:30/14:00-15:00

参加者 15 名

演奏を聞きながら隣の人の身体に触れ、リズムを伝え合いました。



03/31(木)

10:15-11:30/14:00-15:00

参加者 20 名

これまでのワークショップの内容を体験できる動画を届け、見ていただきました。

実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

知的障がいや声を発する機能の障がいなど、言葉によるコミュニケーションに限界がある方がリエゾン笠間を多く利用しています。そういった方々の生活の「余暇」にアプローチすることは、日中活動という役割の中で試行錯誤があり、難しさも感じています。そのなかで、額田さんたちの音を楽しむワークショップは感覚そのものに訴えかけるのか、徐々に利用者みなさんもリズムに乗るなど、音を楽しんでいることを身体で表現している様子を間近で体感することができました。(野口正寛)

Tさんの歯ざしりやHさんの絶叫等が音楽になってびっくりした。

楽器にあまりなじみのない方が楽しそうに音で表現していて印象的だった。



音楽の楽しさを利用者といっしょに体験できてよかった。

アーティストからのコメント

音楽は、演奏を追求したり作曲技法を極めるだけでなく、開かれたコミュニケーションツールであることを強く実感しました。誰かと誰かが「音楽で繋がる」ということは、一部のポピュラーソングのスローガンではなく、例えば現代音楽、ジャズ、ロックとジャンルを問わず、どんな音楽でも起こり得ると思いました。何より、いわゆる「難解」とも思われがちな自分の音楽が、はじめて社会の中に存在している(誰かのために鳴っている)と思えたワークショップでした。これからもさまざまな人たちと音楽を奏でていきたいです。(額田大志)

まとめ

どの回も、まずはジャンベなどの楽器や歌、さらに床や壁、スリッパなどその場にある物から生まれる音による額田さんたちの演奏を聞くことから始まりました。そのあと参加者のみなさんもいっしょに音を鳴らしたり、リズムを感じたり、指揮者となって身体や表情で音を出すタイミングの指示を出したりと、さまざまな音楽への関わり方を体験する時間となりました。聞く、鳴らす、見るといった体験を通して、日常のなかで音に触れたときにも、楽しみ方が広がるのではないかと思います。

ぬかた・まさし
額田大志

作曲家、演出家。東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科卒業。2013年に人力ミニマルミュージック楽団『東京塩麴』結成。また2016年に演劇カンパニー『ヌトミック』を結成。「上演とは何か」という問いをベースに、音楽のバックグラウンドを用いた脚本と演出で、パフォーミングアーツの枠組みを拡張していく作品を発表している。『ぼんやりブルース』(2021)が第66回岸田國士戯曲賞ノミネート。その他、広告音楽や舞台音楽も数多く手掛ける。 <http://www.nukata.tokyo/>



リエゾン笠間での ワークショップを 見学して

今回は、重症心身障がいの方との芸術活動を研究テーマのひとつにされている、女子美術大学准教授の野呂田理恵子さんに、リエゾン笠間でのワークショップの一部にご一緒していただきました。そのときに感じたことを寄せていただきました。

※野呂田さんを講師にお招きした勉強会の様子はP.28 - 29でご紹介しています。



「音楽の世界の入り口に立つ」

野呂田理恵子（女子美術大学 准教授）

私自身、他の重症心身障がい者の施設にて7年間、美術分野のアート活動の実践経験があることからご依頼を受け、1日目の午前中に見学をさせていただきました。リエゾン笠間のみなさん、作曲家の額田さんたちにお会いすることは、今回が初めてです。

私の隣には車椅子に乗ったUさんがいました。ワークショップが開始しても全く反応せず、手に布ボールを握っています。職員さんが手を取り、リズムに合わせてボールをポンポンポンと口に当てました。Uさんの顔がほころび、音楽の世界の入り口に立てた「その時」を目の当たりにしました。職員さんたちは、利用者さんといっしょに楽しみ方を見つけるエキスパートです。

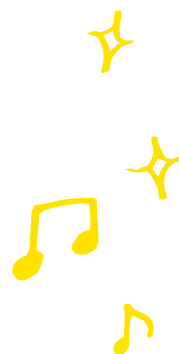
打楽器奏者のタカラさんは大きく太鼓を「一打」しました。部屋全体の空気が震え、煌めいた瞬間でした。それを合図に利用者・職員のみなさんが、音楽の世界へ一段と引き込まれてゆくのです。やはり、プロの音は空間全体の雰囲気を変換させる力があります。

後半では額田さんが、指揮者役を立てる場面をつくりました。利用者のみなさんが、みんなの前に立って全身で指示を出すことは、ちょっと恥ずかしいけれども気持ちがいい、という経験の創出です。これによりその場の全員が、利用者・職員という立場に関係なく指揮者役を意識してよく見る、合わせる、応援する気持ちへと変化していきました。特に職員さんたちにも役を回していったことが、相乗効果を生み出すことになったのです。もう少し工夫をすれば、お互いの音を聞くことで横にいる仲間に対してのこれまで以上の意識を持てるようになると想像されます。そうなれば、障がい者としてではなく、一人の大人として「社会性」が刺激され、育つ可能性が見えてきます。

この素晴らしい経験を、職員さんと利用者さんとの日常的な関わりに溶け込ませることがこれからの鍵になってくるでしょう。利用者さんたち、職員さんたちの、ゆっくりとした変化を楽しみにしています。

野呂田理恵子 のろた・りえこ（写真中央）

女子美術大学卒業、東京芸術大学大学院修了、環境デザイナーを経て渡英。パーミンガム・シティ大学大学院 Art, Health and Well-being 修了。美術博士。多様な人々がアート活動を通して共に受け入れ合う経験を重ね、健康な社会づくりにつなげる「社会包摂のためのアートワークショップ」「ファシリテーション」を専門としている。アートミーツケア学会理事。特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン理事。



支える



ここでは、障がいのある人の芸術文化活動を支援するコーディネーター育成に関する取り組みをご紹介します。今年度は福祉施設での日中活動に焦点を当て、先行研究から見える現状と課題や、障がいのある人との芸術文化活動の実践から生まれる関係性の広がりについて、ゲストを招いてお話をうかがう勉強会を行ないました。今回は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、全2回をオンラインでの動画配信としました。また、参加者のみなさん同士で感想を交換する機会として、オンライン交流会・相談会も行いました。

勉強会

報告会

第1回 福祉施設における日中活動の今とこれから

公開日 2022年1月7日(金)～1月17日(月)

参加者 53名

収録場所 障害者スポーツ文化センター ラポール上大岡 多目的室(神奈川県横浜市港南区上大岡西1-6-1 ゆめおおかオフィスタワー8F)

整音・編集 柏木賢和



◆日中活動の場における課題

今回は、独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園(以下、のぞみの園)の研究部で研究員をされている岡田裕樹さんに、平成29年度から30年度にかけて行われた「障害者の福祉的就労・日中活動サービスの質等向上のための研究」を軸に、障がいのある人の日中の過ごし方を支える制度のこれまでの変遷と、今後どのようなことがあったら良いのかについて、お話をうかがいました。

研究を行ったのぞみの園は、1971年に国立コロニーのぞみの園として群馬県高崎市に開園しました。全国から、重度・最重度の知的障がいや、重度重複障がいのある方を受け入れて、当時は「終生保護」の施設としての役割も担っていました。2003年に独立行政法人のぞみの園として発足した際に、従来の終生保護から地域移行へと方針を大きく変え、現在に至っています。

今回の研究の背景には、障がいのある人の日中活動を支える生活介護や就労継続支援B型といったサービス提供する施設数、またその利用者数が年々増えているにも関わらず、実態把握が十分にされていないという課題がありました。そこで、全国規模の調査を実施し、アンケートやヒアリングなどを通してサービスの質の評価方法や指標の提案、先駆的な事例の取りまとめを行いました。その調査を経て、利用者の高齢化、重度化や広範囲の送迎支援が求められているなどの実態が分かってきました。それに伴って、利用者の権利擁護や利用者個々の特性に合わせた支援に課題を感じている施設が多くあったり、地域の社会資源の不足や地域間のサービスの格差が問題になっていることも明らかになりました。

◆支援を振り返るきっかけとしての「自己点検チェックリスト」

こうした結果から、多様な施設が存在する現状の中で、一定の支援の質を担保することや、支援をする上での基本的な姿勢を改めて示す必要があると考え、「自己点検チェックのためのガイドライン案」が作成されました。また、それぞれの施設で職種や立場に関係なく、自分たちの支援を振り返る、意見を交換し合うためのツールとして使ってもらえるように、「自己点検チェックリスト案」もあわせて作成されました。「課題だけでなく、自分たちの強みや得意なこと、頑張っているところもみんなで確認し合えるツールになれば」と話す岡田さん。共通の指針としてのチェックリストがあることによって、ひとつの施設の悩みにとどめず、地域の課題として施設間のつながり生まれるきっかけにもなるかもしれません。「正解があるものではないので、各施設の実態に合わせてチェック項目を変えていただければ」と、活用の広がりも求められます。

◆障がいのある人の生活における芸術文化への期待

また研究結果からは生活介護のあり方として、さまざまな活動を通して生きがい・やりがいを感じられるための支援や、地域の課題に沿った活動や社会参加が実現できるような支援が求められていることが見えてきました。それを叶えるツールとして、芸術文化活動は大きな役割を担えるのではないかと岡田さんは話します。芸術文化活動を通じた自己表現には、年齢に関わらず生涯にわたって生きがい・やり

ゲスト：岡田裕樹（独立行政法人国立重度知的障害者総合施設 のぞみの園 研究部研究員）

がいを持って取り組める活動となること、地域とつながるきっかけになること、総じてQOL（生活の質）を高めることにつながることを期待できます。また、障害者権利条約第30条で「文化的な生活、レクリエーション、余暇及びスポーツへの参加」が明記されていることに触れ、障がいのある人も権利として芸術文化を楽しむことができるということにも言及しました。近年はさまざまな芸術文化活動が展開されていますが、まだまだ選択肢が少ないのが現状です。支援センターには「芸術文化活動に興味があるのに機会に恵まれなかったり、敷居が高いと感じている障がいのある人・そのご家族・支援者と芸術文化をつなぐ役割を担ってほしい」と、期待を寄せていただきました。

QOLを高めるには、またそのための支援の質をどう評価するかは、課題も残ります。のぞみの園ではWHOが取りまとめているICF（国際生活機能分類）の活用を推奨しています。障がいの状態だけではなく、社会参加といった環境因子など、障がいのある人を取り巻く環境を含めてその人の生活を捉えるツールです。ICFを活用することで、本人の全体像が捉えやすくなり、例えば本人の強みはなにか、活動が社会参加につながっているかなどが確認しやすくなることを期待できます。「支援するなかでは、どうしても課題を見つけて克服するという捉え方になりがち。でも本当の目的は課題解決ではなく、それに

よって社会に参加できたりすることがゴールだと意識するのが大事です。」と岡田さんは話します。

◆その人を、その人として受けとめるために

最後に「よい支援、よい施設とはなにか」岡田さんの考えをうかがいました。そこにいる障がいのある方一人ひとりが大切に支援されているということは大前提とし、支援をする職員さん、特に中堅や若い世代の方が生き生きと活躍できている施設はいい実践をしている印象があるそうです。人材育成や、支援が途切れないようなPDCAの工夫など、施設で働く職員が大事にされているということも、よい支援につながると言えるかもしれません。

障がいある人との関わりには、答えというものはなかなかありません。だからこそ、いつも自分の立ち位置を確認できたり、悩んでいる仲間と出会えたりする場所が必要だと感じます。また、ICFで示されている捉え方のように、障がいの有無や、支援する/されるといった立場などによって人を細分化せずに、その人をその人としてまごとして受けとめるための方法が福祉の現場では求められているように思いました。それは、まさに芸術文化が得意なことでもあります。今後もさらに障がい福祉と芸術文化をつなぐ活動を広げていきたいと思いました。

岡田裕樹 おかだ・ひろき

1975年生まれ。一般企業を経て障害福祉に関わり、埼玉県内の社会福祉法人にて主に知的障害者の支援や相談支援など15年間勤務。2017年より国立重度知的障害者総合施設のぞみの園の研究員として従事し、現在に至る。これまで、高齢障害者、強度行動障害、就労支援、地域支援など、障害福祉に関するさまざまな研究に携わる



コラム

自己点検チェックを取り入れた職員研修

日時：2022年1月25日（火）15:30～16:30 場所：Zoomを使用 参加者：11名

横浜市緑区にある障害者地域活動ホーム「みどり福祉ホーム」では、勉強会第1回に参加した後、実際に職員研修で自己点検チェックリストを取り入れるということを試み、支援センターも同席させていただきました。一人ひとり、事前に記入したチェックリストの点数を発表していくと、ほとんどの人が同じ項目を高く、あるいは低くつけていました。「ふだん何気なく行っている支援を振り返ることができた」「施設としての弱み・強みを、みんなで共有することができた」とたくさんの気づきが生まれていたようでした。



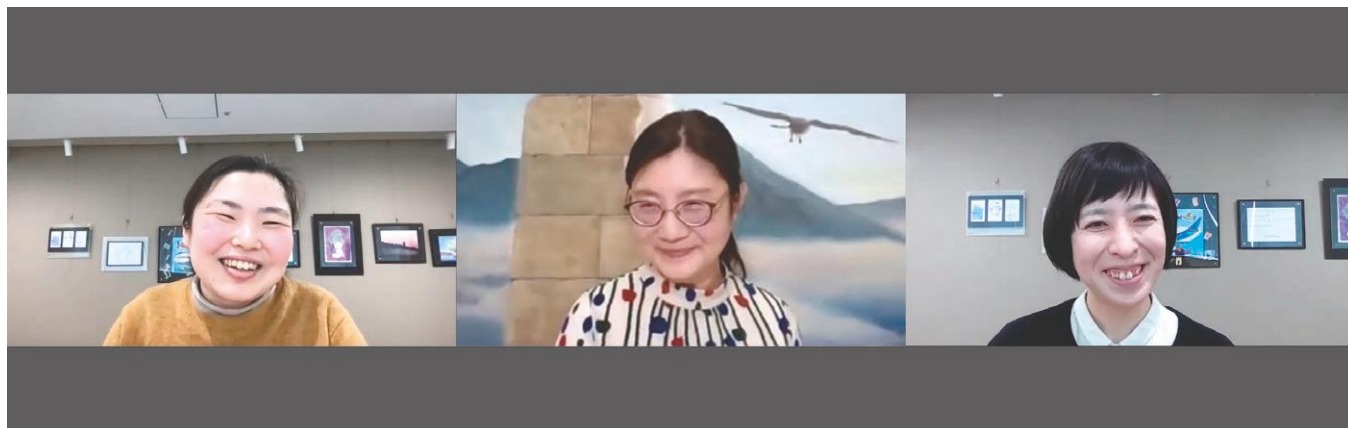
第2回 重度障がいのある人との表現の場づくり

公開日 2022年2月25日(金)～3月7日(月)

参加者 63名

収録場所 オンライン会議システムZoomを使用

整音・編集 柏木賢和



◆環境デザインとの出会い/ イギリスでのアート活動の経験

この回では、病院や重症心身障がいのある方が過ごす福祉施設などにおける表現活動について研究されている野呂田理恵子さんをお招きし、表現が生まれる場で起こっていることを紐解きながら、そこから見える関係性の広がり可能性について考えを深める機会となりました。

野呂田さんのもともとのご専門は環境デザインです。高校時代、駅で路上生活を送る人たちの姿を目にする一方、横浜港周辺では大規模開発によりビルがどんどん立ち並ぶ。そのギャップに違和感があった野呂田さんは「上辺だけの幸せではなく、ふつうの暮らしの中で心を豊かにし、生活の質の向上につながることに携わりたい」と考えるようになりました。そんなときに出会ったのが「人は環境によって変えることができる」という心理学者ジョン・ワトソンの言葉でした。そこから環境デザインを大学・大学院で学び、卒業後、公共建築物の色彩デザインなどに関わったあと「公共とは何か」についてアート・デザインの文脈で学び直すために、イギリスのバーミンガム・シティ大学大学院への進学を決めます。その専攻名は「Art, Health and Well-being」(アートと健康と、よりよく生きること)でした。

大学院では初年度に社会包摂をアート活動で進める理論を学んだ後、国立バーミンガム子ども病院でアートボランティアとして関わりました。病院では、治療のために地域社会から疎外されがちな患者の社会参加支援と人権の保障を目的に、院内のさまざまな場所で

毎日アート活動が行われていました。

野呂田さんは、もう一人のチームメイトとともに毎回用意した材料をもとにその場でテーマを決め、まずは創作のきっかけとなる見本を作っていました。それを真似するかしないかは参加者の自由です。また、周りの参加者の様子にも興味を持てるように声掛けをすることで、さらに工夫が生まれてきました。みんなで創作する環境において相互に影響し合うことで病気で苦しんでいるのは自分だけではないことを知り、困ったときには助け合えばいい、という外向きの視野の広がりを感じられます。この経験を帰国後論文にまとめ、アートミーツケア学会で発表したことがきっかけに、川崎市にある重症児・者福祉医療施設「ソレイユ川崎」の施設長・医師の江川文誠さんから美術分野の制作活動(以下、アート活動)の依頼を受けました。

◆重症心身障がいのある方との アート活動で得た気づき

ソレイユ川崎は、重症心身障がいといわれる重度の知的障がいと重度の肢体不自由が重複している方に、医療ケアやリハビリなど個々のペースに合わせた生活を提供している施設です。言葉でのやりとりが難しい重症心身障がいのある方たちに初めて会った野呂田さんは、どんなアート活動をすればよいのか想像がつかず、一度はお断りをしたそうです。しかし何度もアプローチを受け見学を重ねるうちに、入所者のなかには施設外の人と継続的に関係性を築いた経験がない人もいたということに気がきました。「これが社会包摂の真逆、社会から疎外されている状態か」とショックを受けた野呂田さんは、とにかく何かしなければ、とアート活動を引き受ける決心がつきました。

ゲスト：野呂田理恵子（女子美術大学 准教授）

「あつとなアート」と名付けられた活動は、利用者さん13人、職員さん7人程度といっしょに始まり、コロナ禍の影響を受けるまで、7年間続きました。まず取り組んだのは、環境づくりでした。アートに苦手意識がある職員さんもあるなか、イギリスでの経験をもとに、創作を心から楽しいと思えるよう働きかけました。1年も経つと、職員さんたちから「自分が楽しんでいれば利用者さんたちにも伝わると気づいた」「職員個々の引き出しや魅力が広がっていった」といった声が聞かれ、雰囲気も変わっていきました。また変化は、アート活動以外の場面で他者に関心を向けるようになるなど、利用者さんにも徐々に表れてきたそうです。「ここで提案しているアートはみんなと一緒に関わるからこそ生まれる、他者とつながる感覚を重視している」という野呂田さん。まずは職員さんに「こうあるべきだという基準によって優劣をつける世界ではなく、みんながいることで創造性を豊かにして自由な発想ができたことを実感する」というアートのあり方を体験してもらうことで、より身近にしていきました。

◆芸術文化がさらに社会とつながるために

人を介するということで共通点が感じられる福祉と芸術文化。一方で異なる分野の人たちのあいだでは認識の違いも生まれがちです。野呂田さんは留学中に「参加型のアート活動が社会にもたらす影響50項目」に出会いました。イギリスでは社会包摂政策にこの考え方を取り入れ、文化施設などでのアート活動を展開しています。野呂田さんはこれを参考にソレイユ川崎向けにカスタム化して指標とし、活動の進め方の羅針盤にしていました。アート活動に期待できる効果はなにか、なぜ利用者さんとアート活動を行うのか、そこに職員さんの

どんな力が、なぜ重要なのか。「指標」があることによって共通認識が生まれ、みんなが安心して納得して進めることができると考えました。

2018年には「文化芸術推進基本計画」に社会包摂が芸術文化の目的のひとつに明言されるなど、芸術の価値が拡大されているなか、このような重症心身障がい者の福祉施設でのアート活動における効果を広くに発信していくことは、社会における芸術文化の意義を投げかけることにもつながります。また、より活動を効果的にするためには、芸術家が継続的にその施設に関われる環境が重要です。「芸術家と時間をかけてケア以外の関わりをとおして信頼関係を築いた経験は、障がいのある人にとってさらに地域とのつながりを持つ準備になっていく」と野呂田さんは話します。

社会における芸術文化の意義や価値、内容そのものはまだ発展途上であるといえます。障がいのある人の生活にとっての芸術文化の重要性を主張したり、活動の方向性をともに深めたりする対話の場を生むために、芸術家、福祉施設、そして支援センターのような中間支援組織が協力して、継続的かつ安定的に活動できるような土壌づくりを進めていきたいと思いました。

野呂田理恵子 のろた・りえこ

プロフィールについては
P.24をご覧ください。



コラム

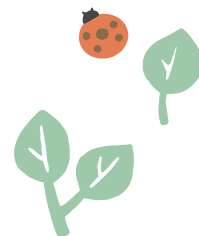
オンライン交流会・相談会

日時：2022年3月11日(金) 16:00～17:00 場所：Zoomを使用 参加者：5名



今年度の勉強会にご参加いただいたみなさんにオンライン上でお集まりいただき、今回の勉強会の感想や、ご自身の活動のなかでふだん感じていることなどを参加者同士でお話する機会を作りました。福祉施設等で障がいのある人の支援に関わっている方や、障がい者の芸術活動をサポートする事業を行なう芸術団体の方などにご参加いただきました。アート活動に限らず、ひとつの取組みを施設内やさらに地域に輪を広げるために工夫していることや、障がいのある人の意思決定支援についてなど、活発な意見交換となりました。

オンライン報告会



「地域とともに考える障がい福祉と芸術文化」

公開日：2022年3月11日(金)～3月31日(木) 参加者：31人 整音・編集：柏木賢和

この報告会では、今年度の事業についてご紹介するとともに、さらに「地域」の視点から障がいのある人の芸術文化活動について考えを深める機会としました。今回は、動画公開によるオンライン開催としました。

【第1部】芸術家とともに過ごす時間

第1部では今年度の活動報告と、福祉施設で行なった芸術家によるワークショップ2事例についてご紹介しました。

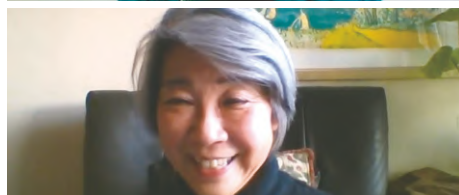
福祉施設職員と芸術家をゲストにお招きし、ワークショップで起こっていたことを振り返りながら、それぞれから見た参加者の変化や、自身が得た気づきについてお話しいただきました。

〈ぱれっと・はだのでのダンスの取組み〉

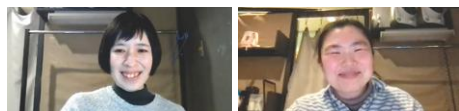
収録場所：オンライン会議システムZoomを使用 ゲスト：川嶋恵子(秦野市地域生活支援センター ぱれっと・はだの 職員)、岡田智代(ダンサー・振付家)



ぱれっと・はだのでのダンスの取組み(P.14～15参照)について、職員の川嶋恵子さんと、ダンサーの岡田智代さんとともに、改めて振り返りました。



今回伺ったぱれっと・はだのは、秦野市の地域生活支援の拠点であり、基本的にはどなたでも利用できる施設。障がいの枠にとらわれず同じ地域住民として交流することで、共生社会の実現を目指して活動しています。「地域」をキーワードにしてさまざまな事業を展開するなかで、今回は精神障がいのある人の居場所となるフリースペースの提供などを行う、地域活動支援事業での取組みとしてワークショップ実施にご応募くださいました。



ご一緒にいただいたダンサーの岡田智代さんは、作品創作のほかに、中高年に向けたストレッチやヨガを地域で教えています。生徒さんたちと、育児や介護などの相談ごとを交わす関係も築きながら、生活や日常に近い場所にある身体に目を向け続けてきました。ダンスの取組みは初めてというぱれっと・はだのみなさんと、日常の中にある身体をととした表現を見つける時間をつくっていただけたらと思い、今回岡田さんにお声がけをしました。

取組みを通して発見があったこと

今回は精神障がいのある大人だけではなく、子どもたちも参加することを伝えられていた岡田さんは、実際にその場で参加者の反応を見ながら、障がいの有無、年齢に関わらず楽しめる内容を探っていきましました。それまでダンスにハードルの高さを感じていたという川嶋さんも、いっしょに参加してみて、暮らしの中の動きがダンスになるんだという発見があったそうです。また「ふだん言葉での表現が苦手な参加者も、自分の中にある思いを表現できている印象を受け、身体をととした表現の可能性を感じた」と話しました。

岡田さんは、毎回見学をしつつも参加を躊躇していた男性が印象に残っているといいます。最終日、岡田さんの「マイケル」という名前で参加するのはどう？という提案に、それなら、と参加。外で踊るのをためらっていた場面では、BGMを流すスピーカーを持ってほしいとお願いすると、自然とその場にいてくださいました。「今までの枠組みにとらわれず、違う役割だったら参加できるかもしれないという可能性は今後も大切にしたい」と岡田さんは話しました。

障がいのある人と芸術文化の関わりの今後の可能性

今回の取組みを通して川嶋さんは「障がいがある人にとって芸術や文化に触れる機会が少ない。率直にもっとこういう機会があったらよい」と感じたそうです。今回地域の入所施設の方から関心が寄せられたように、病院や地域で生活をする方にも同じように機会が求められているのではないかと、ということは支援センターとしても今後考えていきたいと思いました。

今回はいろんな背景の方が参加し、いっしょに時間を過ごす機会となりました。「ワークショップの内容を参加者に合わせるだけでなく、そこにいる人と向き合うということが大事。どうなるか分からないけれど、そこで起きていることすべてを受け入れるということがダンスの場面でも、日常生活でも大切だと思った」と岡田さんからも取組みを通しての印象をお話しいただきました。

芸術文化にできることのひとつは、そこにいる人が混ざることで生まれるおもしろさを、みんなで共有する場をつくることだということを、改めて感じました。

〈 第3けやきでの美術の取組み 〉

収録場所：オンライン会議システムZoomを使用 ゲスト：山田龍(地域活動支援センター 第3けやき)、小野亜斗子・轟岳(ドゥイ/造形ユニット)



第3けやきでの美術の取組み(P.16～17参照)について、第3けやきの山田龍さんと、造形ユニット「ドゥイ」の小野亜斗子さん、轟岳さんに、改めてお話を伺いました。

第3けやきは、相模原市にある地域活動支援センターで、主に精神障がいのある方が通う施設です。もともと企業からの下請けの仕事を受けていましたが、2年前に方針転換をし、近隣のごみ拾いや、中学校での講演活動など地域交流に力を入れ始めました。その矢先にコロナ禍になり、地域に出づらくなったり余暇プログラムができなくなったり、活動の幅が狭まっていきました。この状況だからこそ積極的に外部とつながりたいという思いから、今回の公募にご応募くださいました。そんな第3けやきでのワークショップを引き受けてくださったドゥイのお二人は、小野亜斗子さん、轟岳さんによる造形ユニット。「ドゥイ」はネパール語で「2」という意味です。横浜市石川町で子ども向けの造形教室を開いているほか、幼稚園や保育園、学童保育でも活動しています。「教室といってもお手本通りに作ったり、工作や絵が上手になることを目指すのではなく、自分たちがきっかけづくりをしながら、工夫する力やひらめく力が身につく時間になれば」と轟さんは話します。

取組みの中で大切にしていたこと

今回ドゥイのお二人は、どのような思いを持って第3けやきを訪れたのでしょうか。「初回は参加者の興味や好きなことを知るために、簡単な作業だがいろいろな素材に触れられて、やろうと思えば工夫もできる内容にした」という小野さん。さまざまな素材をラミネートではさんでみるという初回は、最初は戸惑いが見えましたが、終わるころには意欲が感じられたことが印象的だったそうです。また、轟さんは「ふだんの造形教室同様、こちらからやり方を提示しすぎないように気をつけていました。実際にみなさんと時間を過ごしたうえで、次回の内容を考えていきました」と関係をづくりながら回を重ねていったと話しました。

初めは緊張が感じられた参加者のみなさんですが、「素材で遊んだり、完成のかたちを探ったりという内容は、すぐに参加者にマッチしていた」と山田さんは参加者の様子を振り返りました。自由にやっていると、ということが伝わったことで創造力が引き立てられていたように感じ「いろんなものを用意して、自由に創造力を使って遊んでみる、ということは今後の活動にも活かしたい」と山田さんは話しました。

障がいのある人と芸術文化の関わりの今後の可能性

完成した看板は、今回のワークショップのエピソードとともに周囲に伝えていながら、さらに外部とのつながりを模索したいと話す山田さん。今後芸術文化活動と関わるうえで「地域のアーティストとつながるノウハウを、支援センター含めて考える機会があれば」と支援センターへの期待を寄せてくださいました。また、これまで福祉施設でのワークショップを何度か経験している小野さんからは「福祉施設のなかで、もっと作る行為自体の楽しさが伝わったら。私たちが訪れなくても、どこにでもあるものを使ってできるアイデアを渡すことができれば」と、ワークショップに限らない関わり方の可能性を話してくださいました。

今回の取組みを通して「ワークショップには作り方を教えに行くという面もあるが、時間を共有することでなにかが生まれる“泡立つ瞬間”があることを改めて実感した」と小野さん。それぞれの時間の過ごし方が許容されている場のなかで、誰かのつくりたい気持ちが周りに伝わっていき、また違うひらめきにつながっていく。そんな風景が日常の場に広がっていくといいなと思いました。



川嶋恵子 かわしま・けいこ

社会福祉士、精神保健福祉士、相談支援専門員。「秦野市地域生活支援センター ぱれっと・はだの」の職員として、2020年から地域活動支援事業(フリースペース運営、プログラム企画立案、ピアサポーター養成・ピア活動支援)を担当する。



岡田智代 おかだ・ともよ

プロフィールについてはP.15をご覧ください。



山田龍 やまだ・りょう

精神保健福祉士として神奈川県内の医療機関、行政・教育機関、福祉サービス事業所等の勤務を経て、現在はNPO法人けやきの会にて管理職を務める。特技のけん玉を活かし、自称「けん玉ソーシャルワーカー」として地域づくりを目指す。



ドゥイ

プロフィールについてはP.17をご覧ください。

【第2部】地域福祉から考える障がいと芸術文化

収録場所：障害者スポーツ文化センター ラポール上大岡 多目的室(神奈川県横浜市港南区上大岡西1-6-1 ゆめおおかオフィスタワー8F)

ゲスト：佐塚玲子(特定非営利活動法人よこはま地域福祉研究センター センター長)



第2部では、横浜市を中心とした、神奈川県内の地域福祉に関する中間支援に取り組んでいる特定非営利活動法人よこはま地域福祉研究センターの佐塚玲子さんをお招きして、地域福祉の観点から、障がいのある人の地域との関わりや芸術文化に期待される役割についてお話をうかがいました。

さまざまな「あいだ」に対話をもたらす地域福祉

佐塚さんがセンター長を務めるよこはま地域福祉研究センターは、「あいだの人になる」をモットーに調査・研究を主軸にしながら、障がいのある人や子ども・家族の地域生活を広げるプロジェクトなどを行っています。人と人との対話をもたらすことが「あいだの人」の役割であると考え、これまでさまざまな「あいだ」に入り共生社会の実現に向けて働きかけてきました。現在生きづらさを抱える人々は多世代に広がり、その課題も多様になっています。課題解決のアプローチとして、本人や家族に対する具体的な支援と、社会につながり続けられるような長期的な支援の両輪となる必要があります。しかし特に障がいのある人にとって、ライフステージに応じた切れ目のない支援を行っていくことが難しい現状もあります。医療・福祉・教育など多分野が連携して、みんなで本人の「生きる力」の回復を支えていく。そのような地域福祉の役割のなかで、「人間関係に調和と思いやりを与え、相互に理解し合い尊重し合う土壌をつくる」とされる芸術文化は福祉の場にもっと取り入れられてもよいのではないかと佐塚さんは投げかけます。

芸術文化をもっと身近に

芸術文化は生活の中にもあると考える佐塚さん。料理やガーデニング、お孫さんたちの絵など、ご自身の生活のなかのことに触れながら「芸術文化には生きる力を強くする、そして社会を変えたいと思っている」と話します。だからこそどんな障がい児・者にとっても、もっと身近なものになってほしいと期待を寄せました。そのためには、どのライフステージの段階でも心動くものに会えること、さらに「やってみたい」と思ったときに参加できる環境が必要です。そこには当事者・家族だけではなく、いっしょに考える伴走型の支援者が求められます。芸術文化の分野でも、例えば美術館に鑑賞だけではなく体験できる機会などがあれば、楽しみ方に広

がりも生まれ、より身近になるかもしれません。また、芸術文化への興味が仕事や社会参加など、さまざまな生きがいとなる可能性にもつながります。「やってみたい」という気持ちによる経験と人とのつながりを通して、個人の可能性が広がり、生きがいを持てるような環境が生まれることは、社会全体の豊かさであるとも言えます。

困りごとが複雑多様化し、対象者も幅広くなっている現在において、それぞれの問題を解決するためには、より多くの専門性が必要になっていきます。自分たちだけでは解決できないときは、違う専門性を持つ人同士が手を取り合う場面も求められ、そのようなつながりづくりが支援センターのような中間支援の役割でもあります。そのような「あいだ」の人になるにはどうしたらよいのでしょうか。佐塚さんは「人や社会に対する関心と観察力をもって相手への想像や関心を巡らせることが大切。さらに、専門的な知識と情報、実行するためのネットワークと求められることは幅広いが、まずは自分の問題意識や関心から始めてもよいのでは」と話します。

芸術文化は「楽しい」を起点に障がいの有無、年齢を問わずに関われる可能性を含んでいます。芸術文化の幅を狭めず、生活の中でそれぞれが感じた「ここがいいね」という気持ちや、心震えるような瞬間を大切にしながら、多様な人たちをつなぐ活動を続けていきたいと思いました。



佐塚玲子 さつかにいこ

プロフィールについては
P.12をご覧ください。

今年度の事業を振り返って

最後に、今年度の取り組みを「つなぐ」「つくる」「支える」の3つの柱を通して振り返るとともに、今後の展望について考えます。



	成 果	課 題
つなぐ	パンフレットやウェブサイトを通して、多くの人に相談窓口の存在を知っていただくことができました。 相談内容の中でも特に多い、創造、交流、発表に関する情報を届けるために「神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターだより」をウェブサイト、メーリングリストにて発行しました。実際に発表の機会につながったという方もいらっしゃいました。	障がいのある人の芸術文活動に関する情報を、必要とする人に適切に届けるためには、障がい福祉、芸術文化だけではなく、教育や生涯学習など、多分野との連携の必要性を感じています。支援センターの活動周知を含め、さまざまな分野との情報交換の機会をつくっていききたいと思います。 
つくる	ワークショップ実施施設を募集する公募には、応募件数21件と多くの施設から関心が寄せられました。 「職員の発想だけではない活動をしたい」「施設が地域とつながるきっかけとしたい」と、福祉施設の芸術文化活動における課題と、芸術家による芸術文化体験活動への期待が見えました。 	福祉施設での芸術文化活動へのニーズが高まる一方、実際に活動を始めようと思ったときの相談先や、活動を続けるための人材や資金の確保に課題があると感じます。ワークショップ実施から見えた障がいのある人にとっての芸術文化活動の意義について、他の福祉施設や地域の文化施設、自治体などとも共有しながら、福祉施設における芸術文化活動のよりよいあり方について考えていきたいと思います。
支える	今年度は福祉施設における日々の活動に焦点を当てた内容の講座をオンラインで開催しました。多くの障がい福祉関係者の方にご参加いただき、関心の高さが感じられました。全2回終了後には参加者同士が交流を持つ場をオンライン上でつくり、地域や、障がい福祉/芸術文化の分野をまたいだ交流が生まれました。	障がい福祉/芸術文化の分野を問わず、コロナ禍の影響によりふだんのコミュニティ以外の人との交流が減り、新たな視点を獲得の機会が求められていることが感じられました。対面やオンラインの場を活用して、さまざまな立場の人が集まれる機会をつくっていききたいと思います。 

今後の展望

県内事例の収集・蓄積とその発信を通したネットワークづくり

「芸術文化」を障がいのある人の生活のより身近に

障がい福祉、芸術文化、教育など多分野が連携する接点づくり



神奈川県内の障がいのある人の芸術文化活動に関する知見を蓄積し、
芸術文化がより生活の身近に感じられるように、
さまざまな分野と協働しながら「つなぐ」「つくる」「支える」取り組みを続けていきます。

障害と身体を めぐる旅2021

おわりに

障がいと身体をめぐる旅に最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。

私たちが出会ったさまざまな身体、言葉、風景…。みなさんに届いたでしょうか。

この旅の記録が、みなさんの身近にある身体、言葉、風景を、これまでとは違う視点で見つめるきっかけとなったのなら嬉しいです。

今年度はどの事業でも共通して、「試す」「立ち止まってみる」「まわりと共有する」という場面が多くありました。

例えば福祉施設でのワークショップでは、身体や音やものづくりを通して、こんな表現もできるのではないかとみんなで試し、お互いの表現を確認し合う時間が生まれました。また勉強会では、評価ツールなどを活用して、ふだんの障がいのある人との関わりを立ち止まって振り返り、取組みについて周囲の人と共有することを提案していただきました。

この「失敗を気にせず試してみる」「当たり前だと思っていたことを立ち止まって見つめなおす」「感じたことを周りと共有する」ということは、障がい福祉の現場で求められていることであると同時に、芸術文化が得意とすることでもある、ということを改めて感じました。

これからも、どんな状況であっても芸術文化に触れられる場のあり方を探りながら、さまざまな表現が交差する風景を見つけに、旅を続けていきたいと思います。



編集	田中真実、川村美紗	写真	金子愛帆 (P.15～19、22～24)
デザイン	水色デザイン	イラスト	熊本奈津子
印刷	共進印刷	テキスト	川村美紗、鶴田理紗
発行	神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター 〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸1-11-15 横浜S Tビル208 (認定NPO法人 S Tスポット横浜 地域連携事業部内)		
発行日	2022年3月31日		

本事業についての問い合わせ：神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター

〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸1-11-15 横浜S Tビル208

(認定NPO法人 S Tスポット横浜 地域連携事業部内)

TEL：045-325-0410 FAX：045-325-0414 MAIL：info@k-welfare.org

<https://k-welfare.org> 神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター

<https://www.stspot.jp> 認定NPO法人 S Tスポット横浜

過去の事業を動画でもご覧いただけます。

以下のQRコードを読み取るか、YouTubeで「アーティストとともに過ごす時間」で検索ください。



リエゾン笠間 × ドゥイ、勝見淳平
「触る、で広がる世界」



ひふみ × 岸野雄一
「身体を流れる音楽」



みどり福祉ホーム × 砂連尾理
「身体と身体で出会う」



STSpot
Yokohama

神奈川県
障がい者
芸術文化活動
支援センター

令和
3年度